

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26502015

研究課題名(和文) がん患者へのファーマシューティカルケアの質の向上を目指したCSTの開発

研究課題名(英文) Development of a CST Program to Enhance the Quality of Pharmaceutical Care for Cancer Patients

研究代表者

半谷 眞七子 (HANYA, MANAKO)

名城大学・薬学部・准教授

研究者番号：40298568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：愛知県内の保険薬局薬剤師とがん患者とのコミュニケーションの問題点を質的に分析した。薬剤師はがん患者とのコミュニケーション不足や他職種連携による情報共有不足等の对人的要因を挙げ、コミュニケーションスキルも含めた教育支援を求めている。がん患者は薬剤師に「分かりやすい服薬説明」「副作用への対応」等を期待したが、「配慮の欠ける対応」等の改善を求めている。そのため保険薬局薬剤師の対象にSPIKESモデルを活用したコミュニケーションスキルトレーニング(CST)を構築した。CSTによって、薬剤師は一方的な情報提供ではなく、患者の話を傾聴し、気持ちを受け止め、患者のニーズに合った服薬説明の実施が可能となった。

研究成果の概要(英文)：In this study, the challenges of communication between insurance-covered pharmacy pharmacists and cancer patients in Aichi Prefecture were qualitatively analyzed. The former considered interpersonal factors, such as insufficient communication with cancer patients and information sharing through liaison with other professionals, to be associated, and required support to overcome such challenges, covering communication skill. On the other hand, the latter expected the former to <provide understandable explanations of medications> and <appropriately manage adverse drug reaction>, while demanding the further improvement of their attitudes, such as <a lack of consideration>. Based on the results, a communication skill training (CST) based on SPIKES for pharmacists was developed. After training, pharmacists began to listen to patients more attentively, accept their emotions, and explain about medications in accordance with their needs, rather than unilaterally providing the same information.

研究分野：臨床薬学

キーワード：コミュニケーション コミュニケーショントレーニング SPIKES がん患者 薬剤師 服薬説明 模擬患者

## 1. 研究開始当初の背景

ファーマシューティカルケアは、1990年代にアメリカ薬剤師会 (APhA) および、アメリカヘルスシステム薬剤師協会 (ASHP) が「患者の QOL を改善する明らかな結果をもたらすため、責任をもって薬物療法を提供すること」と定義した<sup>1)</sup>。この概念は 1993 年に日本にも導入され、今日の医療における薬剤師の役割の礎となっている。ファーマシューティカルケアでは、薬物療法の安全性かつ有効性、患者個別の薬物療法、服薬コンプライアンス、長期にわたる薬物療法の継続性を確保するために、薬物治療に関する問題点を解決しなければならない。特にがん患者へファーマシューティカルケアを実践するためには患者の状態を評価するためのコミュニケーションスキルが必要となる。現在がんの薬物治療は外来へと移行し、薬剤師が化学療法に関する服薬説明を行うなど、がん患者と接する機会が増加した。しかし、保険薬局では患者への告知の有無が分からず、かつ処方箋以外の患者情報が無いため、薬剤師は十分な患者把握ができずコミュニケーションが困難となっている事例がある<sup>2)</sup>。がん患者が納得し、安心して薬物療法を行っていただく為に、薬剤師は患者とより強い信頼関係を築き、患者背景を理解した上でのケアの提供が求められる。

申請者<sup>3)</sup>らは、本研究のパイロット研究として、保険薬局での薬剤師とがん患者のコミュニケーションの現状について調査した。その結果、患者にケアを実践するために必要な患者情報の収集に関する薬剤師のコミュニケーションスキルの不足が認められ、そのトレーニングの必要性が示唆された。また本研究に参加した薬剤師は、がん患者の処方薬に関連する情報不足、がん患者の心理、背景が分からない、プライバシーを保つ環境がないために適切なコミュニケーションが行えないなどの現状を指摘した。このことは、保険薬局の薬剤師にとって、がん患者に対して告知の有無は勿論だが、「患者は院内でおこなわれた説明をどの程度理解しているのか?」「目の前の患者が知りたいと思っていることは何なのか?」「この患者はどのような心情にいる時期なのか?」「薬剤師ががん患者の人生に関わって行くべきなのか」などのジレンマを抱えながら対応している。薬剤師自身のこうしたジレンマは、がん患者へのケアを大きく制約し、薬剤師の本来持っている職能を十分発揮することが出来ない現状が推察された。

## 2. 研究の目的

がん化学療法においては、効果、服薬状況、副作用、相互作用の確認等の薬物療法、また患者の QOL の向上など、薬剤師が責任をもってファーマシューティカルケアを行う必要がある。患者が抱える問題や悩みを解決するために患者とのコミュニケーションが必要

不可欠である。本研究は、保険薬局の薬剤師のがん患者へのケアの現状を明らかにするとともに、その結果を基に、薬剤師ががん患者の心理や背景を理解し、かつ、がん患者にケアを行うために薬剤師の意識・行動変容を促す支援基盤となる「薬剤師のがん患者へのケアを支援するためのコミュニケーションスキルトレーニングプログラム (CST)」の開発を目指した。

## 3. 研究の方法

研究は以下の 3 段階で行った。

研究 1) 愛知県下のがん患者の会に所属する患者で薬物療法 (化学療法、ホルモン療法、がん性疼痛に対する薬物療法) を受けた 16 名を対象とし、対象者を 5-6 名のグループに分け半構造化グループインタビューを実施した。インタビューの内容は、調査者 2 名がグラウンデッド・セオリー法<sup>4)</sup>で分析し、職種や状況・時系列毎にラベルのまとまりからカテゴリを抽出、カテゴリ関連図を作成し、全体の包括的な概念を抽出した。

研究 2) 愛知県の保険薬局薬剤師 17 名を対象に、がん患者との対応に関する認識を研究 1) と同様にグラウンデッド・セオリー法<sup>4)</sup>で分析し、今後のがん患者への支援について検討した。

研究 3) 愛知県下の保険薬局に勤務する薬剤師 20 名を対象とし、悪い知らせを伝達する手順である SPIKES モデル<sup>5)</sup>を用いたコミュニケーションスキルトレーニング (CST) を行い、CST 前後で模擬患者とロールプレイ、模擬患者による満足度評価を実施した。薬剤師のコミュニケーション能力の変化を会話分析法である The Roter Method of Interaction Process Analysis system (RIAS)<sup>6)</sup>により分析した。

## 4. 研究成果

研究 1) がん患者は医師、薬剤師、看護師等の医療従事者との関わりや、家族や他のがん患者からの支えは、がん患者の治療における安心感や喜びを実感していることが明らかとなった。がん患者にとって化学療法は薬による救命など重要な位置づけであったが、多くのがん患者は重篤な副作用による生活への影響や高額な医療費が発生することによる経済的負担に対して苦悩していた。患者にとって薬剤師は服薬支援や医師と患者の架け橋という存在として期待していたが、一部の薬剤師のマニュアル化した対応、共感的な対応が無いことなどへの改善を求める声も聞かれた。

研究 2) 本研究に参加した薬剤師は、がん患者との対応について、他疾患の患者に比べ、患者背景の情報収集を積極的に行った上で、患者の精神面・体調面とともに経済面に配慮した服薬説明をすることを重要な役割として認識していた。しかし、がん患者対応への抵抗感、患者・家族とのコミュニケーション

不足等の対人的な要因が対応の障壁となっていた。また、他職種連携における患者情報の共有不足も課題として明らかとなり、特に告知に関する情報が薬剤師のがん患者との対応、及び服薬説明の内容に影響を及ぼしていた。これらの課題の解決のために、知識だけでなくコミュニケーションも取り入れた教育支援、およびお薬手帳を介した情報共有等の対人業務の強化の必要性が示唆された。研究 3) 保険薬局における薬剤師のがん患者との会話の内容は、CST 終了後には特に患者の不安を受け止める姿勢、相手への承認、正当性を認める情緒的な発話と医学情報、生活習慣等の情報収集に関する発話で有意な上昇が認められた。また、薬剤師の共感、不安・心配、励まし等の感情表現的な発話と患者満足度には有意な正の相関が認められた。本研究で開発した CST は、単に服薬説明するだけでなく、患者の解釈モデルを確認し、共感するスキルの獲得に有用であることが示唆された。

補足) 本研究で行った CST のために下記の 2 件の DVD 教材を作成した。

SPIKES モデルを用いた薬剤師のがん患者へのコミュニケーション：症例 1) 抗がん剤に不安を持つ患者への服薬説明

LEARN モデルを用いた薬剤師のがん患者へのコミュニケーション：症例 2) 医療用麻薬に抵抗を示す患者への服薬説明

#### 参考文献)

- 1) Hepler C. D., Stand L.M., Am.J.Hosp.Pharm., 47, 533-543(1990).
- 2) E.Du Vall, Counseling the oncology patient, Drug Intell.Clin.Pharm. 18, 743-744(1984).
- 3) 川瀬基子、半谷眞七子、亀井浩行、松葉和久、大橋均、藤崎和彦、調剤薬局におけるがん患者と薬剤師のコミュニケーションに関するパイロット研究、医療薬、37、559-566(2011).
- 4) Barney Glaser, Anselm Strauss et al., The Discovery of Grounded Theory, Strategies for Qualitative Research, transaction publishers, 1967 ; 66 : 28314
- 5) W.F. Baile, R. Buckman, R. Lenzi, G. Gliner, E.A. Beale, A.P. Kudelka, SPIKES-A Six-Step protocol for delivering bad news: Application to the patient with cancer, The Oncologist, 5, 302-311 (2000).
- 6) Noro I, Abe K, Ishikawa H. The Roter Method of Interaction Process Analysis System (RIAS). 2nd ed., Aichi, Sankeisha, 2011.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Manako Hanya, Yoshitake Kanno,

Junko Akasaki, Keiko Abe, Kazuhiko Fujisaki, Hiroyuki Kamei, Effects of communication skill training (CST) based on SPIKES for insurance-covered pharmacy pharmacists to interact with simulated cancer patients, J. of Pharmaceutical Health Care and Sciences, 査読有, 2017, Vol.3, No.11

DOI: 10.1186/s40780-017-0080-0

<https://jphcs.biomedcentral.com/articles/10.1186/s40780-017-0080-0>

村山由希子、岡田絢音、亀井浩行、阿部恵子、藤崎和彦、半谷眞七子、愛知県内の保険薬局薬剤師のがん患者対応への認識を調査する質的研究、日本薬剤師会雑誌、査読有、Vol.69、2017、pp.273-280

高野裕佑、半谷眞七子、立松三千子、中村千賀子、阿部恵子、藤崎和彦、亀井浩行、がん患者の薬剤師及び薬物療法に関するニーズを調査する質的研究、YAKUGAKU ZASSHI、査読有、Vol.135、2015、pp.1387-1395

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/yakushi/135/12/135\\_15-00172/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/yakushi/135/12/135_15-00172/_article/-char/ja/)

[学会発表](計 6 件)

柴田貴代、伊藤秀和、伊藤由紀、中神由香、中田常美、新美徳洋、宮嶋貴美、川邊祐子、半谷眞七子、藤崎和彦：がん患者との医療コミュニケーションセミナーにおけるコミュニケーションスキルアップの評価と課題、第 49 回東海薬剤師学術大会(岐阜)平成 28 年 11 月 10 日

新美徳洋、池田義明、伊藤秀和、牛田 誠、柴田貴代、中田常美、宮嶋貴美、川邊祐子、半谷眞七子、藤崎和彦：模擬患者参加型医療コミュニケーション研修会の事例報告、第 49 回日本薬剤師会学術大会(名古屋)平成 28 年 10 月 9 日

岡田絢音、村山由希子、半谷眞七子、亀井浩行、藤崎和彦、阿部恵子：保険薬局におけるがん患者に関連する制度に対する薬剤師の認識を調査する質的研究、第 26 回日本医療薬学会年会(京都)平成 28 年 9 月 19 日

菅野義剛、半谷眞七子、亀井浩行、藤崎和彦、室谷健太：保険薬局薬剤師のがん患者に対応するためのコミュニケーションスキルトレーニング(CST)の効果の検討、第 26 回日本医療薬学会年会(京都)平成 28 年 9 月 17 日

村山由希子、岡田絢音、亀井浩行、阿部恵子、藤崎和彦、半谷眞七子：保険薬局におけるがん患者とのコミュニケーションに対する薬剤師の認識を調査する質的研究、第 26 回日本医療薬学会年会(京都)平成 28 年 9 月 17 日

半谷眞七子：薬剤師を対象とした CST の実践例、第 10 回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会大会(名古屋)平成 28 年 5 月 29 日

[図書](計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
がん患者と薬剤師のコミュニケーション  
<http://yyipe.meijo-u.ac.jp/cancer/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

半谷 眞七子 (HANYA, Manako)  
名城大学・薬学部・准教授  
研究者番号：40298568

(2)研究分担者

亀井 浩行 (KAMEI, Hiroyuki)  
名城大学・薬学部・教授  
研究者番号：60345593

(3)研究分担者

藤崎 和彦 (FUJISAKI, Kazuhiko)  
岐阜大学・医学部・教授  
研究者番号：60345593

(4)研究分担者

阿部 恵子 (ABE, Keiko)  
名古屋大学・医学部付属病院・准教授  
研究者番号：00444274